

脳神経センター長からの一言 vol.14

脳神経免疫疾患の画期的な治療薬が 使えるようになりました

脳神経内科では、近年、新しい治療薬の開発が進んでいます。とりわけ脳神経免疫疾患は、画期的な新薬の診療への導入が目覚ましいです。従来は根本的な治療をあきらめざるを得なかった病気にも、新しいコンセプトの新薬で症状の著しい改善が得られるようになっていきます。ここで、紹介するのは、ごく最近、日本でも医療保険で承認され長期処方が可能となった抗 FcRn 抗体（抗胎児性 Fc 受容体抗体）医薬です。

脳神経免疫疾患では、自己抗体という、自分の体の正常な成分に対して、それを障害するものが作られることで発病することが多いのです。抗体自体は、細菌やウイルスなどの病原微生物が体に侵入したときに排除する防御的な作用を持っています。ところが、一部の人では何らかのきっかけで、自己抗体が誤って作られてしまうのです。抗体には、IgG、IgA、IgM、IgE という 4 種類があり、自己抗体は、IgG という区分に属するものが大部分です。最近、医療現場で使えるようになった抗 FcRn 抗体製剤は、胎児性 Fc 受容体という IgG のリサイクル（再利用）に関わっている分子に結合して、IgG の再利用を減らします。その結果、血液中の IgG が正常な人の 2 割程度のレベルまで減ります。そうすると、IgG の中に含まれる自己抗体も 80% くらい減ることになります。これだけ自己抗体が減ると、自己抗体を介して起こる脳神経免疫疾患は大幅に症状が改善します。

重症筋無力症は、抗アセチルコリン受容体抗体など病気を起こす自己抗体がわかっている病気で、抗 FcRn 抗体医薬により筋無力症状が大幅に善くなります。一方、手足の脱力をきたす慢性炎症性脱髄性多発神経炎は、末梢神経を障害する自己抗体はあると推定されていますが、それが何かわかっていません。しかし、自己抗体が何かわかっていなくても、抗 FcRn 抗体医薬で、未知の自己抗体が減少するために、やはり著明に手足の麻痺が改善します。その効果は、驚くことに 1 ヶ月くらいではっきりしてきます。正常な IgG も減らしますので、感染症が起こってこないかが心配になりますが、これまでの成績では 80 歳代でも安全に使用できています。

当院脳神経内科では、外来での抗 FcRn 抗体医薬の導入に積極的に取り組んでいます。実際に慢性炎症性脱髄性多発神経炎の患者さんに使ってみて、その効果が速やかに出てくるのにびっくりしています。高価な医薬品ですが、幸い、日本では指定難病の医療制度がありますので、適応のある患者さんには病気の早い時期から使用できます。自己抗体で起こる脳神

経免疫疾患では、その原因となる自己抗体が何であるかわかっていなくても、後遺症を残さずに治療できる道が開けたといえます。医薬品の進歩は、本当に素晴らしいと感じます。

2025年6月30日

福岡中央病院 脳神経センター長

吉良潤一